

あざ

さまざまなものがある母斑

野口皮膚科医院

野口幹正 先生

生まれつきなあざを母斑と言います。例えば、皮膚の表面である表皮が原因の表皮母斑、皮脂をつくる脂腺が原因なら脂腺母斑といった具合に、この母斑には実にさまざまなものがあります。

メラニン色素をもつ母斑の場合、色素量、密度、深さによってさまざまな色をしています。同じ黒い粒子でも、密度が薄ければ茶色、深いところであれば光の屈折の結果、青色に見えます。いずれにしても、母斑を形成している細胞そのものは無色で、その細胞が作ったメラニン色素が黒いわけです。生後もメラニンの産生は続きますので、後天的に出現するものや、年々色調が強くなるものもあるわけです。

また、いわゆる赤あざは、血管による母斑で血管腫と呼ばれ、ヘモグロビンの色素である赤や青、紫色などを行っています。増殖している毛細血管の量や深さによっては皮膚面から隆起するものや、潰瘍になるものもあります。

いくつかの母斑には健康保険でレーザー治療が認められています。メラニン色素を標的とした波長を持つレーザーや、血管内のヘモグロビンを標的にするもの、水分を標的にするものなどさまざまなレーザー機器が進歩しています。ほとんどの場合、数種類のレーザーを組み合わせることで1年くらい照射をくり返して治療します。症状によっては切除が必要があったりするものもあります。また、自然に消退するものもありますので、ある期間少しづつでも、あえて治療しないほうが最終的には美容的に優れている場合もあります。

また、母斑を一症状としながらも、身体のさまざまな部位に病変をとともうものを母斑症と言います。この場合は、症候群として経過観察する必要があります。

気になる症状がある場合は、まず医療機関を受診して相談してみてください。